

本章

第1章 理念・目的

1. 現状の説明

(1) 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。

<1> 大学全体

多摩美術大学は1935（昭和10）年の前身校（多摩帝国美術学校）の創立にあたって、その設立趣意書において、「美術は自由なる精神の所産たるを想ふとき、我が美術教育界の缺陷は力説に償するものいふべし。我等同志がこゝに我が美術教育界の缺陷を補填し、我が國美術の振興に寄與せんとする微意に出づ」と壮大な決意を謳いあげている。

美術・デザインの領域における専門教育が官立学校に頼る中、それに匹敵する私立学校を設立し、美術・デザイン領域における専門教育の充実を図ろうとの理念の下に本学は設立された。以来、今日に至るまで美術・デザイン領域における専門職業人、独立した作家の育成を理念としている。

本学の目的・教育目標は、学則の第1条に、「広く造形芸術全般について高度な学理技能を教授研究し、あわせて国際社会に対応する幅広い教養を身に付けた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育者研究者等を育成する」としている（資料1-1）。

同様に、大学院学則の第3条に、「造形芸術全般について高度な学理技能および応用を教授研究し、その深奥を究めて、文化の進展に寄与する」としている（資料1-2）。

専門職業人、独立した作家を育成する上で必要となる「高い専門性と総合性の融合」を掲げている。

<2> 美術学部

美術学部は、国際社会に対応する幅広い教養を身に付けた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育研究者等の育成を目的として、教育研究の内容の充実と高度化を図っている。

美術大学の性格上、来るべき社会に対応する専門的な技能の修得と訓練に重きを置いている。しかし、芸術の創作は、人間を忘れ学理を離れた、単なる職能人にとどまることによっては達成されないものである。教育理念として懇切な実技指導に加えて、次の2つの特徴が挙げられる。

第一に、学理の尊重は創立以来の本学の伝統である。専門教育ならびに教養・総合教育の両者ともに、広い基礎的教養を育成し、学理を中心とした専門教育の推進に努めている。

第二に、人間の主体性の確立と創造性の開発は、美術教育に不可欠の条件として特に重視している。教養・学理・実技にわたる教育は、同時に豊かな心情と自由な創意と批判的な精神に貫かれた、芸術的個性の形成を目指している。

以上の教育目標実現のため、少人数教育を採っている。カリキュラムは特にゼミナールを強化して、人間的接触による指導を徹底している。また、課題解決型のPBL（Project Based Learning）科目により、自ら思考し、具体化する技能を身に付けることを何よりも重視している（資料1-3 p.11）。

〈3〉 造形表現学部

造形表現学部は、美術系大学では、美術・デザイン教育を夜間に行うわが国唯一の学部であり、1989（平成元）年に美術学部二部として開設され、その後1999（平成11）年4月に造形表現学部として発展的改組転換をした。

美術学部と同じく、専門職業人、独立した作家の育成を目的としている。それに加え、造形表現学部は通学至便の地にある夜間学部の特性を活かし、社会人の再教育・生涯教育の機会を提供することを大きな目的としている。月～金曜日は18：00～21：10、土曜日は14：00～21：10が授業時間であり、4年間で卒業できるカリキュラムを組んでいる。また、社会人入学試験制度を設け、社会人の再教育・生涯教育の推進にあたっている（資料1-3 p.63）。

〈4〉 美術研究科

博士前期課程（修士課程）は、美術・デザイン領域における高度な知識と技能を備えた人材を育成するため、1964（昭和39）年に芸術系私立大学ではわが国初めての認可を受けた。

絵画、彫刻、デザインの専攻を設置し、1998（平成10）年に芸術学専攻、2002（平成14）年には工芸専攻を開設して、1研究科5専攻の編成としている。学部からの一貫教育で、クラス制の色合いを濃くし、担当教員によるマンツーマンの指導体制を基本とし、領域の専門性を深めることを目標としている。国際的な視野を具えた人材育成のため、多くの外国人留学生を受け入れている。また、大学院における社会人の再教育の要請に従い、1995（平成7）年に昼夜開講制も導入している（資料1-3 p.78）。

博士後期課程（博士課程）は、社会の急速な変化や学術研究の著しい進展に伴い、幅広い視野と総合的な判断力を備えた人材を育成することを目的とし、2001（平成13）年に開設した。領域に応じた専攻を有する修士課程とは異なり、美術専攻1専攻のみを設置し、領域に捕われぬ美術創作研究と美術理論研究の確立を目標としている（資料1-3 p.78）。

（2）大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。

〈1〉 大学全体

教育理念の伝達については、美術大学の特性を活かし、シンボルマークの制定等により設立当初から取り組んできた。

1935（昭和10）年、創立時の校章は、図案科主任教授であった杉浦非水によるデザインである。同年10月末に完成した校舎の門扉は、青・緑・黄・赤のカラーサインが施され、日本画科を青、西洋画科を緑、彫刻科を黄、図案科（染織、建築を含む）を赤に区分されていた。西洋画実習棟の壁面には、建築家今井兼次教授の下絵による紋章のレリーフが取り付けられていた。このレリーフは多摩帝国美術学校の頭文字TTTBと絵画芸術のシンボルである絵筆が交差し、上部には「芸術愛」を象徴するアカンサスが戴冠されている。

1953（昭和28）年には、杉浦非水デザインの「美」を基調にした校章が制定され、再建された新校舎の正門に個性豊かなロゴタイプのレリーフが設置された。

創立60周年の1995（平成7）年、伝統の継承と新たな目標に向けての創造的な意志を

顕在化する UI (ユニバーシティ・アイデンティティ) 計画が実施され、コンセプト、シンボルマーク、ロゴタイプ、スクールカラーを決定した。

本学の“自由”な校風と、初代校長である杉浦非水の「圖案生活三十年の回顧」にある“意力”という言葉、専門教育の充実に注いできた先人の“意志の力”に思いを馳せ、「自由と意力」を新たな理念として打ち建てた。

新たなシンボルマークは、杉浦非水の羊の頭をシンボライズした校章「美」の原型を変容させている。上下二本のラインが「自由」と「意力」で、第9代学長の五十嵐威暢(2011(平成23)～2014(平成26)年度)が1995(平成7)年にデザインしたものである(資料1-3 p.2～p.9、資料1-4)。

前述のとおり、教育理念等の教職員及び学生への周知については設立時より取り組んできており、現在はホームページを通じて社会に公表している(資料1-5)。そのほかに、受験生に対しては「大学案内」に掲載して周知している(資料1-3 p.2～p.9)。

本学の教育目的は、「多摩美術大学学則」の第1条(資料1-1)に、大学院は「多摩美術大学大学院学則」の第3条(資料1-2)に謳い、教職員及び学生には、「学生ハンドブック」(資料1-6 p.192・p.198)や「履修案内」(資料1-7 p.139、資料1-8 p.33、資料1-9 p.62、資料1-10 p.39)に掲載して周知している。また、本学ホームページを通じて広く社会にも公表している(資料1-11)。

＜2＞ 美術学部

美術学部の教育研究上の目的は学科等ごとに定められ、ホームページを通じて教職員及び学生、広く社会に対して周知、公表している(資料1-11)。

＜3＞ 造形表現学部

造形表現学部の教育研究上の目的は学科ごとに定められ、ホームページを通じて教職員及び学生、広く社会に対して周知、公表している(資料1-11)。

＜4＞ 美術研究科

博士前期課程(修士課程)及び博士後期課程(博士課程)の教育研究上の目的は、ホームページを通じて教職員及び学生、広く社会に対して周知、公表している(資料1-11)。

(3) 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。

＜1＞ 大学全体

毎月定期的に開催される学科長会議において、教育内容等に関する意見交換が活発に行われており、大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性についても検証が行われている。

また、理事長、学長、教務部長、学部長、大学院研究科長の下で、理念・目的を変更する必要があると判断した場合には、教授会又は大学院委員会の審議を経て理事会が決定をすることとなっている。

このようにボトム・アップとトップ・ダウンの両面による検証が行われ、改革が実行される仕組みになっている。

＜2＞ 美術学部

毎月定期的に開催される美術学部の学科長会議において、教育内容等に関する意見交換が活発に行われており、大学・学部等の理念・目的の適切性についても検証が行われている。

＜3＞ 造形表現学部

造形表現学部においても、美術学部と同様に、毎月定期的に行われる造形表現学部の学科長会議で、教育内容等に関する意見交換が活発に行われており、大学・学部等の理念・目的の適切性についても検証が行われている。

＜4＞ 美術研究科

美術研究科においても、両学部と同様に、毎月定期的に行われる学科長会議で、教育内容等に関する意見交換が活発に行われており、大学・研究科等の理念・目的の適切性についても定期的に検証が行われている。

2. 点検・評価

●基準1の充足状況

本学の理念に基づき、美術学部、造形表現学部、及び美術研究科は人材育成の目的、その他の教育研究上の目的を設定し、それらをホームページを通じて公表しており、同基準を充足している。

① 効果が上がっている事項

＜1＞ 大学全体

2014（平成 26）年、本学はこれまでの美術学部（昼間開講）と造形表現学部（夜間開講）の2学部体制を美術学部に一本化して、美術学部として新たに統合デザイン学科、演劇舞踊デザイン学科を開設することになった。これによって、十分な志願者を確保できている。効果が上がっている（第2章・第5章で詳述する）。

② 改善すべき事項

＜1＞ 大学全体

前述のとおり、2014（平成 26）年度の大規模な改組転換を行っており、現時点では改善すべき課題等は認められない。

3. 将来に向けた発展方策

① 効果が上がっている事項

＜1＞ 大学全体

統合デザイン学科、演劇舞踊デザイン学科の設置は、これまで本学が大学・学部等の理念・目的等の適切性について不断の見直しを行ってきた結果である。今後も継続して見直しを行っていく。

② 改善すべき事項

＜1＞ 大学全体

今後も学科長会議等を通じて、教育内容等に関する意見交換を活発に行い、大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性についても定期的に検証を行っていく計画である。現時点では、新たに改善すべき課題等は認められない。

4. 根拠資料

- 1-1 多摩美術大学学則
- 1-2 多摩美術大学大学院学則

- 1-3 多摩美術大学 大学案内 2015
- 1-4 多摩美術大学ホームページ (沿革) > シンボルマーク
<http://www.tamabi.ac.jp/prof/history/>
- 1-5 多摩美術大学ホームページ (教育理念)
http://www.tamabi.ac.jp/prof/message/freedom_and_will.htm
- 1-6 学生ハンドブック 2014

- 1-7 美術学部 履修案内 (八王子キャンパス) 2014
- 1-8 美術学部 履修案内 (上野毛キャンパス) 2014
- 1-9 造形表現学部 学生便覧・履修案内 2014
- 1-10 美術研究科 履修案内 2014
- 1-11 多摩美術大学ホームページ (教育研究上の目的)
<http://www.tamabi.ac.jp/prof/disclosure/regulations.htm>